

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 14 日現在

機関番号：13601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23650374

研究課題名(和文)教科専門教員と教科教育教員の連携による「教職実践演習」指導マニュアルの開発

研究課題名(英文)Development of Guidelines for "Practical Seminar for the Teaching Profession" through Collaboration between Professors of Content Area and Professors of Teaching Methodology

研究代表者

岩田 靖 (IWATA, Yasushi)

信州大学・教育学部・教授

研究者番号：60213295

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、全ての教育学部教員が教員養成に貢献できる「教職実践演習」指導マニュアルを、教科専門教員と教科教育教員が連携して開発することである。具体的に次の3点を明らかにした。臨床経験科目における実習を参観する際にどのような指導・助言を行えばよいか。リフレクション演習に参画する際にどのような指導・助言を行えばよいか。「教職eポートフォリオ(履修カルテ)」を閲覧する際にどのような指導・助言を行えばよいか。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop guidelines for "Practical Seminar for the Teaching Profession" through collaboration between professors of content area and professors of teaching methodology. This research considered the following questions: 1. What kinds of instruction are effective for student teachers when they observe lessons? 2. What kinds of instruction are effective for student teachers when they reflect on their field experience? 3. What kinds of comments and advice should be made in student teachers' portfolios?

研究分野：保健体育科教育学

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学 身体教育学

キーワード：教師教育 教員養成 保健体育科教育 リフレクション 省察 臨床経験 授業研究 ポートフォリオ

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ

H18 中教審答申により、教職課程の質的水準向上のために「教職実践演習」が新設・必修化された。これまでは課程履修により認定した教員免許を、今後は各大学の責任において、教員として必要な資質・能力を身につけたかを評価して認定する手続きが求められている。しかし、教職指導の体制は十分ではない。H13「在り方懇」報告でも、教科教育担当教員と教科専門担当教員とが協力して教員養成学部が独自性を発揮することを期待されているが、実現したと言えない。

(2) 応募者のこれまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯

信州大学教育学部における臨床経験科目の実施・運営に際しては、理念「臨床の知」に則り、学部カリキュラム全体との調和・整合性を図ってきた。臨床経験科目群は4年間の学部カリキュラム全体にわたり体系的に実施されるものであり、学部における他の講義・演習・実習等の科目との往還が可能なように内容編成を行ってきた。「教職実践演習」導入にあたり再検討が必要である。

(3) これまでの研究成果を発展させる場合にはその内容

本学部では、大学院 GP (H19~21)「授業研究アリーナで共創する臨床の知 - 教科専門と教科教育のチーム指導体制で高める現職教員の教科指導力 -」の採択により、教科専門教員と教科教育教員によるチーム指導体制の構築を通して、専門教科の学問的知識に裏打ちされた授業研究を通じてのアクション・リサーチができる現職教員の授業展開力の向上を行ってきた。このチーム指導体制を、学部段階にも適用することによって、教職指導体制を一層拡充できる。

(4) 本研究が、どのような点で斬新なアイデアやチャレンジ性を有しているか

「教職実践演習」の指導体制サポートのためのマニュアルを開発する点

H18 中教審答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」により、「教職課程の履修を通じて、教員として最小限必要な資質能力の全体について、確実に身に付けさせるとともに、その資質能力の全体を明示的に確認するため」、必修科目「教職実践演習」が H22 入学生から開設されることになった。同科目の担当教員は、「教科に関する科目と教職に関する科目の担当教員が、共同して、科目の実施に責任を持つ体制を構築することが重要である」とされており、「特に教科に関する科目の担当教員の積極的な参画が求められる」とも明記されている。

医学部で言えば「卒業試験」に相当するような科目を教職課程に新規開講するにあたって、各大学・学部等でさまざまな議論がなされており、教育 GP が採択された

大学(例えば、北海道教育大、岡山大、愛媛大等)では、全学的規模で、教職課程の在り方と「教職実践演習」指導体制の構築が進められている。しかしながら、多くの学部教員がとまどうことが多く、既に教職課程での学習が開始されている H22 入学生の指導の体制が整っているとは言えない状況である。

そこで、本研究で、教科専門教員・教科教育教員・教育科学教員という各領域の全学部教員が教員養成に積極的に貢献するための「教職実践演習」指導マニュアルを作成することにより、学部教員も関係教育機関(附属学校、公立学校、青少年教育施設等)教職員も、共通認識を持ちながら適切な教職指導を実施可能になる。すなわち、本研究の推進自体が、教員養成カリキュラム改革の契機となり、信州大学教育学部における教員養成カリキュラムの改革に直結する。

保健体育科の教科専門教員が教員養成カリキュラムを開発する点

教職課程では、教員免許状取得に必要な教科に関する科目と教職に関する科目を履修させるために、各教員が個別に担当科目の目標と内容を設定して、講義・演習を行ってきた。しかし、教職志望学生がこれらの知識と技能を統合する場合は「教育実習」しか用意されてきていなかった。そこで、教科専門領域と教科教育領域の知識と技能を統合して保健体育科の授業を展開できるように、教科の専門性を授業実践につなげるための仕組みとしての「協働的授業研究モデル」を活用することが必要である。このことにより、体育学、運動学、学校保健学、野外教育、スポーツバイオメカニクス等を専門とする教科専門教員と保健体育科教育学を専門とする教科教育教員が協働しながら教員養成カリキュラムを開発することが可能になる。

(5) 本研究が、どのような新しい原理の発展や斬新な着想や方法論の提案を行うものであるか

「授業研究アリーナ」による協働的授業研究モデルをカリキュラム開発に適用する点

上記(3)記載の大学院 GP の目的は、1) 専門教科の学問的知識に裏打ちされた授業研究を通じて、アクション・リサーチができる現職教員の授業展開力を向上させること、2) そのための体制づくりとして、教科専門教員と教科教育教員、さらには教育科学教員のチーム指導体制を構築すること、という2点であった。複数の教員によるチーム指導体制は、「授業研究アリーナ」と名付けられている。授業研究アリーナは、教科専門教員の「理論知」、教科教育教員の「実践知」、現職教員の「経験知」を交流させることによって、新たな「臨床の知」を創出することを目的とするものである。

より具体的には、1) 授業の設計、2) 授業の実施、3) 授業の省察の各段階において、教科専門教員は、その教科の基盤となる学問領域の基本概念・方法の観点から、教科教育教員は、教科の目的論、内容・方法論、教材論の観点から、現職教員の授業研究を支援・指導することが期待されている。

本研究では、この協働的授業研究モデルを、保健体育科教員養成カリキュラム開発に適用する。このことは、学生や現職教員を指導する際に協働的なチーム指導を行うことにとどまらず、教員養成カリキュラム開発に際しても、このモデルが適用可能なことを示すことになる。

(6) 本研究が成功した場合に、どのような卓越した成果が期待できるか

保健体育科教員養成に関する臨床経験科目における指導・助言のポイントを提案する点

保健体育科教員養成は、教員養成系大学・学部その他、体育系大学においても行われている。本研究により、保健体育科教育に関する教科専門教員を多数擁している体育系大学における「教職実践演習」指導や「教育実習」指導に際してのポイントを提案することができる。

他教科における「教職実践演習」指導のポイントを提案する点

本研究により開発される「教職実践演習」指導マニュアルは、保健体育科教育分野だけではなく、信州大学教育学部における他教科にも援用できるものである。よって、本研究の成果を広く公表することによって、本学部だけではなく、他の教員養成系大学・学部および教職課程を持つ多くの大学・学部にとって必要とされている、教科専門教員と教科教育教員が連携した「教職実践演習」指導のポイントを提案することができる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「教職実践演習」導入に際して、全学部教員が教員養成に積極的に貢献できるためのマニュアルを、教科専門教員と教科教育教員が連携して開発するものである。そこで本研究では具体的に次の3点について明らかにする。

- (1) 臨床経験科目における実習を参観する際にどのような指導・助言を行えばよいか：学校現場や青少年教育施設における学生の活動参観時の指導・助言のポイントを明らかにする。
- (2) リフレクション演習に参画する際にどのような指導・助言を行えばよいか：学生のグループ討議による省察場面における指導・助言のポイントを明らかにする。
- (3) 教職ポートフォリオを閲覧する際にどのような指導・助言を行えばよいか：教職志望学生の「学びの履歴」に対する教員コメントのポイントを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 臨床経験科目における授業参観時の指導の在り方の検討

1年次「教育臨床基礎(H23)/教育臨床入門(H24~)」における授業参観(特に教育実習生による研究授業参観と授業研究会参観)の事前指導及び事後指導の内容を記録・分析する。

(2) 臨床経験科目におけるリフレクション演習参画時の指導の在り方の検討

1年次「教育臨床基礎(H23)/教育臨床入門(H24~)」、2年次「教育臨床演習」、3年次「教育実習事前・事後指導」、4年次「教職実践演習」において、学生は、臨床実習後に、グループ討議によりリフレクション演習を行う。これらの場面で、参画する学部教員がどのように指導・助言を行うのか、学生による討議の様子と学部教員による指導の様子を記録・分析し、指導のポイントを検討する。

(3) 臨床経験科目における「教職eポートフォリオ(履修カルテ)」閲覧時の指導の在り方の検討

学生は、1年次「教育臨床基礎(H23)/教育臨床入門(H24~)」、2年次「教育臨床演習」、3年次「教育実習事前・事後指導」、4年次「教職実践演習」を履修する中で、「教職eポートフォリオ(履修カルテ)」を作成し、自己の活動をリフレクションすることと合わせて、今後の課題を明確化する。その際に、閲覧した学部教員がどのようにコメントを記入するのかを記録・分析し、指導のポイントを検討する。

(4) 国内外の教師教育に関する資料収集・分析

日本や諸外国における教員養成に関する文献・資料を収集・分析する。分析にあたっては、本研究の目的に対応して、実習参観時の指導・助言の在り方、リフレクション演習時の指導・助言の在り方、教職eポートフォリオ閲覧時の指導・助言の在り方、の3点を視点に分析する。

(5) 国内の学会における情報収集と研究成果発表による意見交換

国内学会等に参加し、教師教育研究者との交流を通して情報収集を進めることと合わせて、これまでの成果を発表して意見交換する。

4. 研究成果

- (1) 1年次に履修する臨床経験科目「教育臨床基礎(H23)/教育臨床入門(H24~)」履修学生が、教育実習の研究授業を参観する際の事前指導・事後指導の在り方を検討することと合わせて、教員養成初期段階の学生が教育実習生の授業研究会へ参加することの成果と課題を明らかにした。参観記録をとりながら授業参観することに加えて、授業研究会にも参加することによって、教

員養成初期段階の授業研究力を育てることができ、このことが「教育実習」や「教職実践演習」の履修に体系的につながることもわかった。

- (2) 1年次に履修する臨床経験科目「教育臨床基礎(H23)/教育臨床入門(H24~)」のリフレクション演習参画時の指導の在り方を検討した。前期と後期のそれぞれの最後に、附属松本学校園における臨床経験をふり返り、自分が経験したことの意義・意味を考え、その場では気づけなかったことを再発見するとともに、経験によって成長した自分をも自覚し、今後の活動に生かせるようにするグループ討議・討議の機会を設定した。そして、専攻・分野別(H23)/コース・課程別(H24~)のリフレクション演習に、1年次生クラス担任である学部教員が加わり、討議のなかから課題や問題を抽出したり、学生の今後に示唆を与えたりするようにした。その結果、附属松本学校園等における臨床経験のリフレクションを、自分の目指す教師像の構築及び2年次以降の自己課題の明確化につなげるためには、リフレクション演習時の教員コメント時にそれらのことを意識したコメントをしていく必要がわかった。
- (3) 2~4年次生で履修する臨床経験科目におけるリフレクション演習の場面に、他学年の学生が参加・参観する仕組みを検討・実施した。2年次生が履修する「教育臨床演習」におけるリフレクションを活性化するように、3年次生が履修する「教育実習事前・事後指導」の事後指導におけるリフレクションの様子を2年次生が参観するようにした。また、4年次生が履修する「教職実践演習」における学びの履歴のプレゼンテーションの場面に、2~3年次生や大学院生が参加することも試みた。このようにリフレクション演習に様々な学年の学生が参加・参観するによって、学生間の相互コメントを同一学年間のみならず、学年を超えたコメントの場を設定する可能性を提案できた。
- (4) 各学年で履修する臨床経験科目を履修する中で、「教職eポートフォリオ(履修カルテ)」の作成を開始することとした。信州大学教育学部のディプロマ・ポリシー(教育の専門家に求められる深い教養に根ざした公共的使命感や倫理観、教育活動を支え、実現する上で不可欠な専門的知識・技能、他者と協働して教育活動をつくる社会的スキル、理論と実践を往還する省察と改善の態度)に対応した自己評価の12観点(教育にかかわる幅広い知識や教養、教育に携わる専門家としての使命感・倫理観、各教科の背景となる学問に関する知識、各教科で扱う内容(学習指導要領)の知識と技能、教科指導に関する知識、教科に関する指導技術、授業実践に関する専門的知識・技能、幼

児・児童・生徒理解に関する専門的知識、学級経営に関する専門的知識・技能、コミュニケーション能力や人間関係を調整する社会的スキル、様々な立場の人や多様な専門家をコーディネートする社会的スキル、理論と実践を往還する省察と改善の態度)から、学生は自己評価を行い、それに続いて同じコース・課程の学生間で相互評価することとした。さらに学部教員からの指導者評価を記入することとしたが、1人ひとりに対してコメントすることに対するガイドラインが必要であることがわかった。

- (5) 平成25年度は「教職実践演習」開講初年度であったので、「教職実践演習」を履修する4年次生が、1年次から蓄積してきた「教職eポートフォリオ(履修カルテ)」を活用して、自己の学びの履歴をふり返ることができるようになった。学生による自己評価(総合評価と観点別評価)学生間の相互コメント、そして指導者(4年次生の場合は卒業研究の学部指導教員)コメントを記入・閲覧できるシステムを実際に本格運用した。「教職実践演習」のまとめにあたって、指導者コメントの記入を依頼し、「教職実践演習」を履修してきた4年次生に対する指導者コメントを分析するためのデータを収集した。
- (6) 研究成果を、日本教育大学協会全国教育実習研究部門研究協議会、日本教育大学協会研究集会等において研究発表し、教師教育研究者との交流を通して情報収集・意見交換を行った。詳細は、「5.主な発表論文等」に示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

谷塚光典・東原義訓・鈴木克明・喜多敏博・渡邊あや、教職実践演習に対応した教職eポートフォリオが有する機能の比較検討、教育システム情報学会研究報告、28(5)、2014、75-80、査読無

<http://ci.nii.ac.jp/naid/40019938775>

谷塚光典・安達仁美・岩田靖・平野吉直・結城匡啓、教職eポートフォリオに対する学部教員による指導者コメントの分析の試み、平成25年度日本教育大学協会研究集会発表概要集、2013、52-53、査読無
谷塚光典、信州大学におけるeポートフォリオの運用と工夫-自己評価と相互評価による「目指す教師像」の構築を目指して-、Synapse、23、2013、12-15、査読無

<http://ci.nii.ac.jp/naid/40019863709>

谷塚光典・東原義訓・渡邊あや・喜多敏博・鈴木克明、教職eポートフォリオにおける相互評価機能の実装、日本教育工学会研究報告集、JSET13-2、2013、23-28、

査読無

<http://ci.nii.ac.jp/naid/40019744335>

安達仁美・高柳充利・武者一弘、教師の力量形成と地域連携：地域とともに育つ教師（中部教育学会第 61 回大会シンポジウム）中部教育学会紀要、13、2013、47-50、査読無

<http://ci.nii.ac.jp/naid/40019862601>

谷塚光典・安達仁美・岩田靖・平野吉直・結城匡啓、教員養成初期段階におけるリフレクション指導の在り方 - 学生の課題の明確化と目指す教師像の構築に向けた学部教員の役割 -、平成 24 年度日本教育大学協会研究集会発表概要集、2012、40-41、査読無

谷塚光典・安達仁美・岩田靖・平野吉直・結城匡啓、体系的な臨床経験科目におけるリフレクション指導の検討 - 教科専門教員と教科教育教員の連携に着目して -、教育実習研究（日本教育大学協会全国教育実習研究部門）、25、2012、16-17、査読無

安達仁美・八木雄一郎・西一夫・谷塚光典・三澤雅志・中村紗矢香・丸山剛生、教員養成初期段階の学生に対する授業研究方法指導プログラムの開発（2） - 教育実習生の授業研究会への参加を通して -、平成 23 年度日本教育大学協会研究集会発表概要集、2011、38-39、査読無

〔学会発表〕（計 7 件）

谷塚光典・東原義訓・鈴木克明・喜多敏博・渡邊あや、教職実践演習に対応した教職 e ポートフォリオが有する機能の比較検討、教育システム情報学会 2013 年度第 5 回研究会「スマートデバイスによるこれからの教育・学習環境 / 一般」、2014 年 1 月 11 日、高知工科大学（高知県香美市）

谷塚光典・安達仁美・岩田靖・平野吉直・結城匡啓、教職ポ - トフォリオに対する学部教員による指導者コメントの分析の試み、平成 25 年度日本教育大学協会研究集会（第 1 分科会 A「教員養成カリキュラムの改革」）2013 年 10 月 5 日、札幌全日空ホテル（札幌市）

谷塚光典・東原義訓・渡邊あや・喜多敏博・鈴木克明、教職 e ポートフォリオにおける相互評価機能の実装、日本教育工学会研究会「教育研修の設計と評価 / 一般」、2013 年 5 月 18 日、長崎大学（長崎市）

谷塚光典・安達仁美・岩田靖・平野吉直・結城匡啓、教員養成初期段階におけるリフレクション指導の在り方 - 学生の課題の明確化と目指す教師像の構築に向けた学部教員の役割 -、平成 24 年度日本教育大学協会研究集会（第 1 分科会 A「教員養成カリキュラム改革の具体的取り組み」）2012 年 10 月 6 日、鹿児島県民交

流センター（鹿児島市）

谷塚光典・安達仁美・八木雄一郎・西一夫・鈴木崇晃・斉藤優一・河野寛樹、教員養成初期段階の学生に対する授業研究方法指導プログラムの開発（3） - 教育実習生の研究授業参観の事前・事後指導の効果 -、日本教育大学協会全国教育実習研究部門第 26 回研究協議会、2012 年 10 月 5 日、鹿児島大学（鹿児島市）

安達仁美・八木雄一郎・西一夫・谷塚光典・三澤雅志・中村紗矢香・丸山剛生、教員養成初期段階の学生に対する授業研究方法指導プログラムの開発（2） - 教育実習生の授業研究会への参加を通して -、平成 23 年度日本教育大学協会研究集会（第 1 分科会 A「教員養成カリキュラムの改革とその具体的取り組み」）2011 年 10 月 15 日、サンポートホール高松（高松市）

谷塚光典・安達仁美・岩田靖・平野吉直・結城匡啓、体系的な臨床経験科目におけるリフレクション指導の検討 - 教科専門教員と教科教育教員の連携に着目して -、日本教育大学協会全国教育実習研究部門第 25 回研究協議会、2011 年 10 月 14 日、香川大学（高松市）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩田 靖 (IWATA, Yasushi)

信州大学・教育学部・教授

研究者番号：60213295

(2) 研究分担者

平野 吉直 (HIRANO, Yoshinao)

信州大学・教育学部・教授

研究者番号：40293534

結城 匡啓 (YUKI, Masahiro)

信州大学・教育学部・教授

研究者番号：90302398

安達 仁美 (ADACHI, Hitomi)

信州大学・教育学部・助教

研究者番号：30506712

谷塚 光典 (YATSUKA, Mitsunori)

信州大学・教育学部・准教授

研究者番号：30323231